

記憶の街——三浦哲郎「忍ぶ川」の戦後

笹尾 佳代

1 はじめに

三浦哲郎「忍ぶ川」は、一九六〇年一〇月の『新潮』新人作家特集号に掲載され、翌年、第四四回芥川賞を受賞した。初出誌の目次に添えられた「死に呪われた」一家に残った私は薄倖の娘を得て雪国に結ばれた。詩情豊かな私小説。」という紹介文が示すように、発表時から家族の問題を抱えた作家の実体験という読みのコードが与えられた作品である。

中村光夫の『風俗小説論』（一九五〇）をはじめとして、戦後「私小説」の価値が問い直された後の「忍ぶ川」の芥川賞受賞は、その是非を問う議論を再燃させる（1）。そのため「忍ぶ川」の評価もまた、作家の〈真実〉の物語であることを賞賛するものと、リアリティへの単純な回収を避けようとするものという、二つの軸の周辺にあったといつてよい。

作家の〈真実〉が求められる時、何よりも注目されたのは「血」をめぐる問題」の所在であった。二人の姉の自殺、長兄の失踪、さらには頼りにしていた次兄の突然の失踪という「私」の抱えていた問題は、「忍ぶ川」を初めとして、「恥の

譜」（一九六一・三）、「初夜」（同・一〇）、「帰郷」（一九六二・二）、「団欒」（一九六三・四）と、短期間に発表された続編とみなされる作品にも描き出されていく。これらの作品を断続的に発表する過程で三浦は、兄妹の不幸を「仔細に点検しながら、その生ぐさい收穫を私が生きのびるための糧にしよう」と思ったと述べ、「私は自分の血を手懐けなければならない」と、「血」の問題との葛藤ゆえの執筆であることを明らかにした（2）。「私小説」のリアリティとは、作家をめぐる情報が相補的に関わり合うことで生成されるものであることは言うまでもない。諸言説との関わりの中で「忍ぶ川」は、作家の最大の苦悩であった「血」の問題とどのように対峙していたのかという問題系に遡及的に置かれ、「生立」との格闘が投影されたはじめての作品」として評価されてきた（3）。

作家の問題の直接的な表出であることを疑わない「私小説」的な読みへの反動は、〈虚構性〉の発見となつて現れた。早くは、中村真一郎が「物語としての完結」を賛美し、〈虚構〉を孕んでいるからこそその「完結」であるとして、従来の「私小説」の文脈に回収されないものと評価した（4）。「私小説」

の伝統から離れたところでの創作を理念としてきた中村の姿勢が窺えるのだが、小説の言説にあえて「虚構性」を見いだすことそのものに、「真実」であることを自明視する「私小説」的な読みのコードの呪縛が認められるだろう。「私」と志乃の《純愛》を構成された《美》として見出す近年の論考もまた、その《美》を「血」の問題に葛藤する作者の内面の暗さ」を凌駕するものとして意味づけているように(5)、「真実」の賞賛も、その反照としての《虚構性》の測定も(6)、「私」の個別的な問題の範疇に作品を留めてきたと言わざるをえない。「私小説」という評価軸は、この作品を幾重にも絡め取ってきた。

そうした中であって、《私》の問題系から物語を解放したのは前田愛であった。洲崎という土地の記号性に注目した前田は、遊廓の射的屋に生まれたという志乃の過去が明らかになることを、「戦後史の空間」によりやく明るい光がさしはじめたこの時期に、暗い過去の傷口が開かれて行く」様と捉え、物語に描かれた志乃の問題を浮き彫りにした(7)。さらに、「悪所の記憶」に着目した関礼子は、「血の汚れの浄化を願う「私」と、洲崎という街の記憶からの脱出を求める志乃の二つのコンテクストが交錯」する物語として位置付けている(8)。

「街の記憶」を問うことによって、志乃の救済の物語が浮き彫りにされたことは示唆に富んでいる。だが、こうした論考で

も充分に捉えられてこなかったのは、「私」と志乃という個人と、時代の文脈との関係性である(9)。後述するように、二人が歩いた深川は、戦争の爪痕を残した街であった。戦災の跡を留めた街の姿とそこを生きる個人の姿は、作品発表当時の多くの読者の裡に、親和する記憶を呼び起こしたであろうことは想像に難くない。しかし、二人が体験した時空間はこれまで注目されてこなかったのである。

そこで本稿では、「私小説」的な読みのコードや《私》をめぐる問題系からテクストを解放し、二人が体験した時空間が語りだすものに焦点を当ててみたい。「私」という一人の人物の体験を通して描かれたのが、戦争を含み持った過去の時間であることを重視し、時代の記憶を伝えたテクストとして「忍ぶ川」を測定したい。終戦から一五年という時空の中に発表された物語を歴史的な文脈に接続させるとき、「私」の個別的なものに見える体験が《集団の記憶》ともいえるべき様相を呈していることが明かになる。

2 洲崎と志乃

まずはじめに、冒頭部におかれた深川の紹介を確認してみよう。

志乃をつれて、深川へいった。識りあつて、まだまもないころのことである。

深川は、志乃が生まれた土地である。深川に生まれ、十二のとしまでそこで育った、いわば深川っ子を深川へ、去年の春、東北の片隅から東京へ出てきたばかりの私が、つれてゆくというのもおかしかつたが、志乃は終戦の前年の夏、栃木へ疎開して、それきり、むかしの影もとどめぬまでに焼きはらわれたという深川の町を、いちども見ていなかったのにひきかえ、ぼつと出の私は、月に二、三度、多いときには日曜ごとに、深川をあるきまわるならわしで、私にとって深川は、毎日朝夕往復する学校までの道筋をのぞけば、東京じゅうでもっともなじみの街になっていた。

ここでは、志乃が育った深川と「私」が見てきた深川との間に、決定的な断絶があることが明らかにされている。その原因が、「むかしの影もとどめぬまでに焼きはら」った戦争にあることが物語のはじめにおいて確認されているのだ。

深川を訪れた日、「深川東陽公園前」で電車を降りた二人を迎えたのは、「バラック建てのひくい屋並をつらねた街々」であり、最初に眺めたのは次のような建物であった。

「あああ、すっかり変わっちゃって。まるで、知らない町

へきたみたい。おぼえているのは、あの学校だけですよ。」

志乃は、ころぼそげにそういつて、通りのむこうの、焼けただれたコンクリートの肌を陽にさらしている三階建ての建物を指さしてみせた。志乃はその学校に、五年、かよった。(中略)

「だけど、あたしね、どこもかしこも焼けたことはきいて、知ってたんですけど、あの学校が焼けたことだけは、どうしても想像できなかったの、コンクリートの建物がぼうぼう焼けるなんて、どうしても信じられなかったんです。それが、さっきひと目見たなり、ああ、やっぱり焼けたんだとあっけなくわかつちやいました。あの窓のせいなんですわ。コンクリートの建物が焼けるつて、窓という窓が、のこらず黒くなることなんですわね。」

志乃の記憶をたぐり寄せたのは、「焼けただれたコンクリートの肌を陽にさらし」た学校であった。戦災の跡を残した「バラック建てのひくい屋並」の街とは、まさに戦後復興途上の姿であろう。志乃がこの学校の向こうに見ていたのは、東京大空襲の脅威である。

深川を含む江東地区が、東京大空襲の際にとりわけ激しい攻撃を受けたことは周知の通りである。一九四五年三月一〇日の

零時八分、最初の焼夷弾が投下された深川は、一夜の空襲で地区の七七%、建物の九一・一%を消失するという甚大な被害を受ける。被害者数は、死者三万名、負傷者一万七〇〇〇名、罹災者一四万八八〇〇名と伝えられている(10)。

「深川東陽公園前」で下車した二人が見た、焼けただけたコンクリート造りの学校は、駅から「通りのむこう」に見えるという描写と、実際の地図を照らし合わせた時、東陽国民学校と推測される。この辺りにはめずらしく鉄筋コンクリート造りであつたために、戦前は避難所に指定されていたのだが、そのために、記憶されるべき惨劇が起きていた。三月一〇日に当直であつた教師は、当時の様子を次のように伝えている(11)。

火勢ハ益々加ハリ全校舎ハ火焰ニ包マル。プール周辺ニ待避セル者ノ衣服ニ火ノ焼ケツクモノアリ。鉄甲ヲ取りテ水ヲ運び消化ス。(中略)火勢ハ一層加ハリ遂ニプールニ入ル。時ニ二時半。其ノ後約二時間、酒井訓導ト共ニ死闘ヲ続ケ十数名ノ人名ヲ救フコトヲ得タリ。

東天白ミテ見レバ、眼前ニ焼死ノ山アリ、水死者漂フアリ、惨状ニ目ヲ覆フ。一階数十名、一階廊下数十名、講堂数十名、二階・三階、階段九名、三階三名、計百数十名、水死十数名ヲ見受ケラル。

東陽国民学校の悲劇は、校舎の火災、とりわけ「鉄筋校舎の外側だけが残っていて、窓ガラスはぜんぶアメのように流れて固まり、木という木は焼けて、廊下も床もコンクリートになっていました」というように、燃えないと信じられていたコンクリート建築の火災への驚きとともに記録されていた(12)。テキスト内の志乃の言葉はこうした証言と響き合ったものであることがわかる。安全だと考えられていた鉄筋コンクリート建築の内部が摂氏一三〇〇度を超える白熱状態になり、焼死体によって缶詰状態になったという同質の悲劇は、各地で多数起きたという(13)。志乃の母校という個別的な記憶を持つ学校は、鮮烈な戦災の記憶とも結ばれたものであつた。

洲崎へと足を踏み入れようとする際に描かれた洲崎橋も同様に、二重化された記号となっている。

「これが、洲崎橋。」

志乃は、焔にめめられたあとが黒い縞になつてのこつてゐる石の欄干を、なつかしように手のひらでびたびたたき、それから、橋のむこうの空をよぎっている高いアーチを、めずらしそうに仰いで、そこに書いてある、夜はネオンになるのだろう、豆電球にふちどられている文字を、

「洲・崎・パ・ラ・ダ・イ・ス。」とひくく読んだ。

「パラダイスなんて、あたし、なんだかいやですわ。」

志乃は、上気したように頬を赤くしてそういうと、だま
つてあるきだした。

志乃の子どもの頃の記憶を呼び起こした洲崎橋は、「焰にな
められたあとが黒い縞になつてのこつている石の欄干」という、
空襲の跡を伝えたものであった。

東京大空襲下の深川の惨劇は多くの文献が伝えているが、例
えば、洲崎弁天町交番に勤務した複数の警察官をモデルにし、
遺された手記をもとに描かれた、もりたなるおの記録小説では、
洲崎橋の状況が次のように描かれている。

先頭は僕だ。本署にもどるといっても、安全な道があるわ
けではない。

火を避け、火をくぐつて行きつくほかないのだ。

永代通りの火が、いくらか下火になつた感じである。洲
崎橋を渡る。倒れている人を避けたつもりだが、一人、二
人ではないので、踏みつけてしまった。

橋のたもとが盛り上がっている。流れてきた人が引つ掛
かり、詰まったのだ。火がついて燃えている。

B 29は、この地区の周辺に火炎帯を作つた上で、徹底した攻
撃を行つたという。橋の炎上によつて退路を断たれ、水中へ難

を逃れようとした人々を、炎が呑み込んでいく惨状が描き出さ
れている(14)。川面を吹きなぐつた火炎、煙による一酸化中毒
や酸素の急速な減少による窒息、水温の低さのためのショック
死、凍死、溺死など、運河の惨状もまた、多くの人々の記憶に
深く刻まれた悲劇であつた(15)。

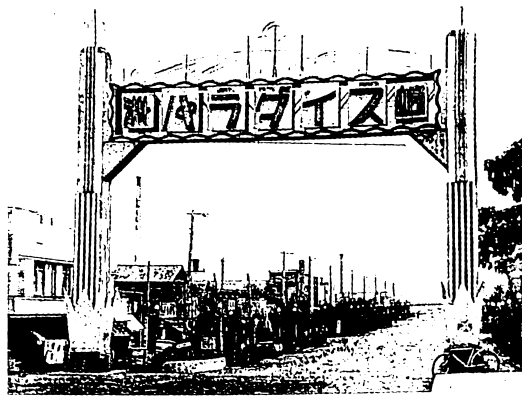
ここで確認しておきたいのは、以上見てきたような戦災をめ
ぐる証言が言説として整理され始めたのは、戦後の時空間の中
であつたことだ。成田龍一は、「戦時に充分に人びとに提供さ
れなかつた戦争をめぐる事態を「共通知識」とすること」に、
戦後、「体験としての戦争」言説が整理されていくことの意味
を認めている。身近な人へ語るのではなく、「書く」という
行為への移行」である戦争体験の記録は「ある種の飛躍と思い
切り」を必要としたために、「リテラシーを持ち、時間的・経
済的に余裕を持つ階層」から始まり、段階を経て浮上していた
(16)。なかでも、戦場の戦闘ではない、銃後の空襲の記録や日
常生活の記録は遅れて登場し、言説の集積が意識されたまとま
った成果は、たとえば鶴見和子・牧瀬菊枝らの生活記録運動の
グループの一九五〇年代末の活動の中においてであつた(17)。

以上の事態を考慮する時、二人が歩く深川の街に残された戦
災の爪痕は、終戦から一定の時間が経過した読者の現在であつ
たからこそ《集団の記憶》となつていた戦争の記憶を多くの
人々の裡に喚起するものであつたと考えることができる。

しかし、そのことを確認した上で改めて留意したいのは、街に記憶された鮮烈な戦争体験から二人が隔てられていながらも、身体感覚を通して追体験できる地点にいたことだ。描かれていたのは、コンクリート建築の火災を「思いがけない発見」として眺め、「焰になめられたあと」のある洲崎橋を「なつかしうに手のひらでびたびたた」く志乃の姿であった。激しい戦争の爪痕が描かれながら戦災が回顧されず、しかし目前にその痕跡が存在するという描写の特徴を確認する時、翻って意識されるのは、二人が立っている「戦争の後の今」であろう。ここに、二人の体験した時空間が、注目すべきものとして浮かび上がってくるのだ。では、それはいつのことなのだろうか。

藤井淑禎が指摘するように「作中時期にかんしてはミステイフィケーションの帷でおおわれている」(18)のだが、二人の見た街の姿はそれだけで、作中時間がある程度限定させる。それは、先の引用部の、洲崎橋の向こうにあった。

「高いアーチ」の「豆電球にふちどられている文字」は「洲・崎・パ・ラ・ダ・イ・ス」と読みあげられた。深川に頻繁に訪れていた「私」も、その地で生まれて一二歳まで育った志乃でさえも、はじめて目にする街である。



【図1】「洲崎パラダイス」入り口のアーチ

(出典：岡崎征男『洲崎遊廓物語』青蛙房、1986・7・7)

一八八八年に根津遊廓の移転によって創設された洲崎遊廓は、二人が訪れた時、特殊飲食店の「洲崎パラダイス」へとその姿を変えていた。この地が東京大空襲によって壊滅したのは先に確認した通りだが、戦後、戦禍を逃れた人々が戻り、「洲崎パラダイス」が誕生する。それは、一九四六年十一月の内務省通達によって「風致上支障のない地域に限定して集団的に認めるように措置する」ことになった特殊飲食店街、すなわち赤線と

しての再生であつた。

ここで確認しておきたいのは、戦前の洲崎遊廓の消滅は、戦火によるものではなかったことだ。岡崎榎男『洲崎遊廓物語』によると、一九四三年一〇月三十一日、洲崎遊廓の立ち退きが軍令によつて決定されている。当時二三〇軒ほどあつた業者は一部を除いて、各地に強制疎開させられ、娼妓の中には軍の慰安婦になつて楼主とともに基地へ移つていった者もいたという。その後遊廓の建物は、海軍に接収され、軍需工場であつた石川造船所の微用工らの寄宿舎にあてられた(19)。

志乃は「終戦の前年の夏、栃木に疎開し」ており、街を離れた理由は、「深川でやけ出された」と「私」への手紙の中に記していた。だが、土地の記憶と照らし合わせる時、志乃が離れた洲崎はすでに遊廓ではなく、当時はまだ空襲も受けてはいない。志乃の疎開は軍の接収の影響を感じさせるのだ。さらに、栃木では神社のお堂に起居しながらも、戦後、一家が元の地に戻らなかったのは、戦災に加えて、一九四六年の公娼廃止令による廓の消滅という事態が想起されよう。すなわち、街の変転を捉える時、それがテキストに描かれた個人の体験と繊細に響き合っている様が見逃せないものとして浮かびあがってくるのである。

そこで次に、「私」の体験を、歴史的文脈の中におくことから再検討してみたい。先んじて言うならば、「血」の問題を抱

える「私」の個別的な体験とみなされてきた兄の失踪にも、木場という街の変動との深い関連性を認めることができるのだ。

3 木場と「私」

「私」が木場と関わりをもち始めた時期は、木場のはずれの貯水池に着いた時の次の回想部分から、おおよそ明らかになる。

兄を最後に見た場所である。私の兄は高等工業の応用化学を出て、戦時中、海軍省の火薬研究所で魚雷をつくっていたが、戦後、どういう魂胆からか、この貯水池をもつ木材会社に入っていた。名刺をもらつて、肩書きを見ると、いきなり、専務というのであつた。兄は、この会社に五年いた。その四年目に、私は東北の田舎の高等学校を出て上京し、兄の出費で大学へかよつた。

兄が木場にいた時間から、「私」が兄に最後に会つたのは、一九五〇年の春さきのことだと考えることができる。「去年の夏、三年ぶりに上京して、さいしよに木場をあるいた日」という、テキストに最初に示された時間の経緯の記述に従うなら、志乃と二人で深川を歩いたのは、一九五四年の夏ということになる。つまり、兄の失踪から四年後に、深川歩きの現在がある

はずなのだが、その後、兄の失踪は、この日から「三年前」の出来事として語られていく(20)。

仮に、三浦の自筆年譜を参照するならば、兄の失踪は一九五〇年の春の出来事であり、その後すぐに三浦は帰郷、再び上京したのは一九五三年四月であるため、テキストに最初に示されていた経緯の記述と合致する。しかし、もちろん、兄の失踪から「三年」という記述が虚構であるなど指摘したいのではない。注目したいのは、作中時間の混乱を引き起こす時間の記述が、木場をめぐる描写の中にあることだ。記述のゆれを、兄と最後に出会った木場と後に「私」が目にした木場との差異を刻んだレトリックと見なし、その意味を捉えてみたいのである。作中に描かれた木場の様子を注意深くみてみよう。

兄と最後に会った時の様子は、次のように回想されていた。

私は、金が必要なとき、兄の会社へもらいにいって、兄はその都度、気やすく金をわたしてくれて、柳川鍋など食べさせてくれた。一年たつて、三年前の春さき、しばらく会えなかった兄をひさしぶりに訪ねると、がらんとした事務室の火鉢に覆いかぶさっていた老人が、専務は席をはずしているが、多分貯水池にいるだろうといった。しんとした工場をぬけて、貯水池のふちへ出てみると、春さきとはいえ、まだ冬のなごりのつめたい風が底まで

すきとおった水面にたえず皺をたたんでいるというのに、兄はひとり、鳶口をもって、けれどもべつだんそれを使うふうもなく、ただ筏から筏へと、せわしなくとび移っているのであった。上衣をぬいだワイシャツ姿が痛いほど目にあざやかで、なにかしら、どきつとした。

「がらんとした事務室」の中で手持ちぶさたそうに「火鉢に覆いかぶさっていた」のは「老人」であり、兄のいる貯水池に向かった「私」が通り抜けたのは「しんとした工場」であり、貯水池での兄は「つめたい風」の中「ひとり、鳶口をもって、けれどもべつだんそれを使うふうもな」いのにせわしない姿を見せていた。これらは、木材会社の低迷を思わせる描写の連なりとみてよいだろう。

それに対して、初めて木場が紹介された次の部分を見てみよう。強い風の中にとけ込んだ木の粉が馴れない人を涙ぐませるという街の特徴が示されたうえで、兄と一緒に歩いて歩いた日と、兄と最後に会った時から三年後の木場の様子は、次のように語られている。

私も、兄につれられて、はじめて木場をあるいたとき、泣いて、兄にわらわれた。私は、きょうだい、肩をならべてあるけるうれしさに、胸がはちきれそうだったが、それ

にもかかわらず目だけが泣いてくるのは、やはり風のせいであつた。去年の夏、三年ぶりに上京して、さいしよに木場をあるいた日にも、そのときはすでに兄は帰らぬ人になつていたが、私の胸はある怒りに燃えていたはずなのに、しきりに目だけがくもつたのは、たしかに風のせいであつた。私の目は、ついに木場の風になじまない、あるいは木場のなかでも、私がかまつてあるくコースにひととき木木の粉が濃いのかもしれなかつたが、私はもはや、それに馴れることをあきらめていた。

はじめて兄と歩いた時も、兄の失踪から三年後に訪れた時も、木場の風はしきりに「私」を涙させている。風の中に大量に含まれる木の粉とは、木場の好況を意味しているだろう。「私がかまつてあるくコースにひととき木木の粉が濃いのかもしれな」ということから、木場の中でもとりわけ活況な場所と関わりがあつたことが予想される。風の中の木の粉によつて目がくもつたことが木場の好景氣を象徴しているなら、最後に見た兄の「ワイシャツ姿が痛いほど目にあざやか」だったことと「不吉な予感」が結ばれていることの理由は了解されよう。それらまた、風の中に木の粉が多く混じらない、木場の不況の暗示だとみてよいのだ。

以上捉えてきたように、はじめて訪れた時、兄と最後にあつ

たその一年後、さらにそれから三年後の木場の姿は異なつてゐる。そしてこの日、志乃と二人で訪れた木場には「木の山」があり、「木を裂く鋸」や「えたいの知れない機械」のひびきが聞こえ、「軒をならべた製材所」には「門衛」までがゐる。ここにもまた、兄の木材会社の様子との差異が刻まれている。木場ほど戦後の時勢を直接映した土地はあつたのだろうか。一九五三年八月二七日の『読売新聞』に掲載された次の記事を見てみよう。

深川木場の業者は木材問屋（木材路木、丸太をふくむ）

と製材業者合わせて約六百軒、終戦後三、四年は全国的な戦災復興の氣運にのつて景氣がよかつたのが、二十五・六年ごろから下火になり、二十七年朝鮮動乱による特需の出血受注によつて製材業者の大部分二、三軒が一、二億の借財をつくつて倒産したのを契機に、製材業者三十数軒が軒並みに穴をあけ整理しだしたのがドン底だった。それがこんどの朝鮮復興と、北九州、紀和南山城の大水害復興の氣運に乗つて、木材がウナギのぼりにハネあがり（中略）各業者は競つてこの高値で売つたという。

（休戦・水害以後木場は木材ブーム

— 転げ込んだ二億円 —

この記事によって示されているのは、戦後八年間の木場の浮沈である。一九五三年八月現在の好景気の要因は、朝鮮戦争と北九州、紀和南山城の大水害だという。ここで伝えられている以上に、戦後の木場の変動は大きかった。そこでまず、兄が過ごした戦後五年間の木場の様子を追ってみたい。

木材が、焦土と化した日本の貴重な復興資源であったことは言うまでもない。一九四七、八年頃までは戦災復興と連合軍特需によって、木場はきわめて活況を呈していた。だが、一九四八年二月にGHQによって発表された経済安定原則と、翌一九四九年三月のドッジ米公使による安定政策（いわゆるドッジライン）の明示によって急激にデフレが進行し、木材価格は大幅に下落、木材需要の減少も相まって、一九四九年後半は一転して非常な不況に陥っていた。

ここに追い打ちをかけたのが、一九四九年六月にシャウブ使節団によって発表された税制改革勧告書であった。不況となつたこの時期に国税局の課税追求が行われたのである。当時の混乱は、例えば、一九四六年に一三六軒あつた製材工場が、一九四九、五〇年の不況を経た後の一九五一年には八三軒と、約六〇％にまで減少したという調査が物語っている。しかし、激しい不況と税金にあえぐ一方で、一九五〇年は「木場の戦後が終わった」という「喜びと将来への期待をもって」迎えられた年でもあつた(21)。事實上、戦時中から続いていた木材統制が撤

廃され(22)、待ち望まれていた個人営業による自由競争がスタートしたのだ(23)。

テキストに描かれた木場の様子と兄の姿は、戦後の木場の浮沈を明らかに映し出している。「三年前の春のおわり、自分で木材会社を設立するという名目で資金あつめに帰郷して、私の家の乏しい財産は勿論、方々の親戚からも借金して、その金をもって逐電しました」という兄の行動の背後には、不況と課税追求による危機と、個人営業の再スタートへの期待という、その頃の木場の明暗併せ持った混乱を窺うことができる。

そして木場は、さらなる時流に吞まれていく。一九五〇年六月二五日の朝鮮戦争の勃発である。大量の特需発注によって木材の価格は高騰し、木場は再び活況を呈する。だが、先の『読売新聞』の記事に「特需の出血受注」とあるように、一九五一年二月に政府の物価統制令が適応されたことによって木材価格は抑制され、業者は再び大きな打撃を受けた(24)。しかし、同年七月一〇日に朝鮮戦争の休戦会談が始まり、実質的な休戦状態となった翌年一月一八日以降の復興と、国内各地の記録的な水害とその復興という事態も重なって(25)、その後は総じて安定した好景気となった。



【図2】1955年10月の木場の姿

(出典：深川木場編集委員会編『深川木場』

材木新聞社、1975.4.16)

兄の失踪から「三年後」というレトリックの意味はここに明かとなるだろう。すっかり復活を遂げた木場の風に含まれた木の粉は、訪れた「私」の涙をしきりに誘った。目をくもらせながら木場を歩く「私」を捉えた「ある怒り」とは、木場の復活を目にしたからこそその思いであつただろう。「自分で木材会社を設立するという名目」で兄が集めた資金が、目的通りに用いられていれば、「私」の目前にある活況の中に兄もいたかもしれ

れない。兄を吞み込んでしまった運命への怒り、耐え忍ばなかった兄への怒りであると了解されよう。「心がおとろえる」と決まって深川を歩いた「私」が、「兄のまぼろしに反発して、知らぬまに心がひきしまる」思いとなつたのもまた、逆境を乗り越えた後の好況を目にすることで、耐え忍ばなかった兄への反発を新たにしていたとみてよいだろう。兄は激動の時代の渦中に吞み込まれ、「私」は時代の変転を目前の空間を通して体感していた。

4 時空を紡ぐ／過去に送る

以上みてきたように、洲崎、木場の描写にたみ込まれていた変転の記憶は、二人の過去の経験の意味を浮かび上がらせていた。では、目前の戦後空間を二人はどのように体験していたのだろうか。最後に、その体験の特徴を捉えてみたい。

「深川東陽公園前」で下車した二人が最初に見た焼け崩れたコンクリート造りの学校、廓跡へと向かう際に渡った焰の跡が残った洲崎橋が、東京大空襲を想起させるものであることは先に確認した通りである。激しい戦争の爪痕が示されながら、戦争が語られない描写の特徴は「戦争の後の今」を意識させるものであった。戦争の跡を留めた建造物を手がかりに、戦火を体験していない二人が、記録／伝聞の戦争を記憶に換えていく様

であつたといえよう。

だが、ここで改めて留意しておきたいのは、この体験もまた過去のことであり、二人が目にした街もすでに記憶の場所であつたことだ。再び、冒頭の一文を確認しよう。

志乃をつれて、深川へいった。識りあつて、まだまもないころのことである。

「識りあつて、まだまもないころ」という描写は、志乃との深川歩きが、すでに遠い過去であることを示していた。つまり、以後の出来事は、進行形で語られながらも過去に位置付けられているのである。この語りの現在を仮に作品が発表された一九六〇年頃と考えた時、描き出されていた空間は再び大きく変動していたことに気づかされる。

「洲崎バラダイス」の消滅は、周知の通りであろう。一九五六年五月二三日に公布された売春防止法は一九五七年四月一日に施行された。刑事処分となる完全実施までには一年の猶予がもうけられていたのだが、その一九五八年四月一日を前にして紅灯が一斉に消えていく様は、多くの記事が伝えた(26)。

木場もまた、「歴史的な年といつても過言ではない」(27)と記念される、一九五八年を迎えていた。この年に「木場移転協議会」が発足し、木場の移転運動が本格的におこなわれること

になった。その原因はいくつか挙げられるが、主なものは地盤沈下によって橋桁が下がったことで水路が通行不可能になりつつあること、風水害によって木材が流失し付近の家屋に危害を及ぼす可能性があることであつた。そして、のちに新木場となる埋め立て地の着工へと進んでいく。江戸以来三〇〇年以上も続いてきた木場が、その地から姿を消す日が近づいていた(28)。戦後を色濃く映した街が、再び変容した地点に「忍ぶ川」の語りの現在は置かれていた。「私」の過去を回顧した物語は、多層化された物語時間の構造によって〈戦後〉をも過去のものとして眺望する性質を持っていたのである。

語ることで、〈戦後〉を過去に送ろうとすること。そうした動きは、同時代の言説空間に見出すことができる。岩波書店刊行の『思想』誌上に組まれた特集はその象徴的な事象であろう。一九五六年七月号には、翌八月号の特集原稿募集の次のような記事が掲載された。

最近、中野好夫氏は「戦後は終つた」とある文章の中で述べている。私たちも、もう戦争と決別したい。新しい生甲斐ある生活と思想を確立したい。そして、そのためにこそ、戦後の、あの異常な経験は、無限の教訓を与えるものとして、想起されてよいのではないだろうか。個人的にも、社会的にも、複雑な戦後の現象の渦の中を十余年生きて、

読者諸氏は、何を見、何を感じ、何をつかまれたであろうか。(中略) 諸氏がその立場にあつて目撃し、又は当事者として体験された事件や出来事で、心に消えたいあとを留めたものの記録を綴り、ふるつて応募していただきたい。私たちが希望して止まないものは、意見や批判よりもむしろ、素朴なほどの真実である。

特集名は「わが戦後の体験」である。ここからは、〈戦後〉という時代を区分しようという動きが感じられる。この記事内には、戦後復興、朝鮮戦争、ドッジラインによる安定不況、赤線の消滅といった出来事が終戦後の変転の象徴として示されていた。こうした記事に拠るまでもなく、「忍ぶ川」の「私」が目にした時代の変転は、「集団の記憶」と響き合う性質のものであった。

翌月の『思想』に掲載された特集号には、短期間での募集であつたにも拘わらず三〇〇編を越える原稿が寄せられたため、急速七編を掲載したという編集の内情が示されているが、この後、毎年八月号において、募集原稿による同質の特集が組まれていく。それは「傷は癒えたかーわが家の記録―」(一九五七)、「八月一五日―それは私にとってどんな意味をもつか―」(一九五八)、「私たちの生活と憲法」(一九五九)と、戦後の変転の中の〈私〉を記録するものであつた。

こうした記事から窺えるのは、体験を記録することと〈戦後〉との決別が結びつけられていることだ。それは、時代をくぐり抜けてきた〈私〉(たち)が、その肌身を通した「真実」の体験を記録することによって行われるべきものである。

戦後空間の出来事を身体感覚を通して記録すること。その言説の性質は少なからず、「忍ぶ川」に通じている。だが、体験を記録することによって〈戦後〉を区分し、追悼しようという言葉空間を背後に見るとき、テクストのさらなる特徴が浮かびあがってくる。それを確認するために、二人の戦後空間の体験の特質に再び注目してみたい。

洲崎へと入り、「ぎつしりと娼家がつまっている一角」に自分の生家の場所を探し当てた志乃は「なじるような目で、私をにらんでつよくい」う。

「忘れないように、たとえこらんになつて。」

街の姿は、個人のまなざしを通して複層化されている。志乃の生家の場所であるという個人的な時間の流れと記憶によって、戦前、戦後の変容は単なる断絶として描かれない。目前のすつかり姿を変えた街が、過去との連続性の中に置かれようとしているのだ。

戦前戦後の断絶を浮き彫りにする言説が圧倒的に多い中で、

同じ時空間を描きながら切断を前掲せせず、個人史のレベルで「これまでの時間」が一続きに描き出されようとしていることに改めて、「忍ぶ川」が《私小説》であることの意味が見出されてくる。社会的な時空が戦争を契機に切断されたとしても、《私》には一続きの時間が流れてきた。

深川・浅草・栃木・東北の故郷・K温泉への道行は、断片が線へと結ばれようとしていることを象徴的に示しているだろう。行き先がすべて、二人が過去の一定期間を過ごした場所であることに留意する時、二人一緒の空間の移動は、寸断された時間と記憶とをたどるものであることが分かる。道行も大詰めとなつた「私」の故郷で、志乃は次のように語る。

「(前略) あたしが二十年間、どんなに無駄にくらしたか、よくわかるんです。自分のことはうっちゃって、ただ、他人のために、周囲のために、したいことも、したくないことも、しのんで、しのんで……。」

「忍ぶ川の、お志乃さん。」

「いいえ、もう忍ぶ川なんか、さっぱり忘れて、あしたからはべつの志乃になって、もうこれからは、自分とあなたのことだけを考えますわ。そうして、よい生活をしましうねえ。」

洲崎、浅草、栃木、そして料亭「忍ぶ川」と、志乃の「二十年間」が二人の道行を通して断絶なく紡がれた時、志乃は新たな自己を生き始めた。出来事の断絶が意識されなくなった時、それは一続きの過去として送られたのだ。

次の日、新婚旅行に向かう汽車の中から、志乃は嫁ぎ先の「あたしのうち」を発見し、「私」が赤面するほど喜ぶ。洲崎の生家を「私」に見せた時、「あたしのことは、全部あなたに見ていただきました」と言っていたことを想起するとき、志乃は、空間をアイデンティティの拠り所としていたことがわかる。「忍ぶ川なんか、さっぱり忘れて」と語られた後の《自分の家》の発見は、志乃の新しいアイデンティティの誕生を意味しているだろう。

そして二人の道行は、「学生をよして失意のころ」の私が過ごしたK温泉へと向かう。K温泉は、二人が伴に訪れていない(断片のまま残されている)「私」の過去がたまたみ込まれた最後の地であった。「私」の時間が一続きの過去として集積される終着点への旅立ちとともに、物語は閉じられたのである。

「忍ぶ川」が発表された一九六〇年の『世界』八月号には、終戦後の「今」をめぐると特集記事が掲載されなかった。その誌面は、樺美智子が死亡した六月一日の安保闘争の状況を伝える記事に覆われている。誤解を恐れずに言うならば、終戦によって区分された時空への意識が、現在進行形の事態によって陵

駕されているこの事態は、(戦後)という時代の区切りを象徴的に示すものの一つとなつてはいないだろうか。それは、人々の生活に影を落としている事態の直接の原因を戦争に求める時代精神が薄れたこと、甚大な変転を含みながらも戦争をめぐる時代が一続きの過去となろうとしていたことの現れでもあるだろう。時間の断片を一つの過去として紡いだ「私」と志乃が「その後」を生きはじめようとしていたように、戦争の時代の「その後」がはじまろうとしていたのである。

【注】

- (1) 石阪幹将「私小説論の構想(序) 私小説論の「時代区分」について」(『論究』一、一九八〇・一二)によると、「忍ぶ川」の芥川賞受賞は、「私小説のリバイバル・ブーム」を呼び起こし、一九六一、二年頃には、私小説をめぐる平野謙・伊藤整らの純文学変質論争や、大江健三郎・大岡昇平・奥野健男らの発言が続いたという。
- (2) 三浦哲郎「私と私小説」(『国文学 解釈と鑑賞』二七—一四、一九六二・一二)
- (3) 唐戸民雄「三浦哲郎『忍ぶ川』論——「生の賛歌」の試み」(『立正大学国語国文』三七、一九九三・三)
- (4) 中村真一郎「私小説と実験小説」(『文学界』一五—四、一九六一・四)。
- (5) 渡辺賢治「「私」表現の美しさ——三浦哲郎「忍ぶ川」(『私小説研究』一〇、二〇〇九・三)。
- (6) 木村友彦「三浦哲郎『忍ぶ川』論——(私小説)としての古き／新しさとしての(私小説)」(『国文学 解釈と鑑賞』七六—六、二〇一一・六)は、物語の後半部分で帰省した二人を包み込む(純白)の世界に、「演出的な意図」を見出している。
- (7) 前田愛「三浦哲郎『忍ぶ川』深川・駒込」(『幻景の街——文学の都市を歩く』小学館、一九八六・一一・一〇)。
- (8) 関礼子「忍ぶ川——恋愛紀行の意味するもの」(『国文学』三六一—、一九九一・一)。
- (9) 藤井淑禎「「忍ぶ川」と『忍ぶ川』のたくらみ」(『立教大学日本文学』七〇、一九九三・七)は、(純白)の表象を、「純愛・純潔の時代といつていい昭和三十年代を特徴づける時代色ともいふべき」ものと位置付け、廊の射的屋の娘であるという志乃の「負性」を包み込むものとする。テクストを時代へと開いた数少ない論考の一つである。
- (10) 「深川空襲のあらまし」(『東京大空襲・戦災誌』編集委員会編・『東京大空襲・戦災誌』東京空襲を記録す

る会刊行、一九七三・三・一〇。警視庁消防部の調査では、死者一万八一三八名、負傷者一七二二名となっていることが示されながらも、「最も大きい数字を示した調査が妥当と思われる」という理由から、帝都防空本部が発行していた『帝都防空本部情報』第一四七号（三月一六日一五時現在）が参照されている。

- (11) 「東陽国民学校では……」（『東陽小学校創立七〇周年記念誌』書誌情報不明、前掲10、所収）。

- (12) 「焼けた学校」（前掲10、所収）。東陽国民学校については、一九七一年七月号の『都市問題』（六二）に発表された児島令枝「市民意識の開発―現場から 東陽小学校」の中でも「鉄筋建築で戦災を受けた校舎として都内で始めてといわれる」と書かれるなど、戦後も長く記憶されていた。

- (13) 松本善治郎『江戸・東京 木場の今昔』（日本林業調査会、一九八六・四・一五）

- (14) もりたなるお『大空襲 昭和二十年三月十日の洲崎警察署』（講談社、一九八八・二〇・一八）

- (15) 東京大空襲の記録に加えて、例えば松本善治郎（前掲13）など、木場の歴史を伝える文献等にも多数記録されている。

- (16) 成田龍一『戦争経験』の戦後史 語られた体験／証

言／記憶』（岩波書店、二〇一〇・二・二三）

- (17) 鶴見和子・牧瀬菊枝編『ひき裂かれて―母の戦争体験』（筑摩書房、一九五九・六・二五）。三浦自身もこの頃、「木場の橋」（『産経新聞』一九六一・六・一八）の中で、橋の上や欄干に残された様々な形の「黒いしみ」が「焼け死んだ人の脂」であると兄に教えられたことを回想している。

- (18) 藤井淑禎（前掲9）。

- (19) 芝木好子『洲崎パラダイス』（講談社、一九五五・二・二〇）、岡崎征男『洲崎遊廓物語』（青蛙房、一九八六・七・七）、川本三郎『銀幕の東京 映画でよみえる昭和』（中公新書、一九九九・五・二五）を参照されたい。川本は、「パラダイス」とカタカナになったのは進駐軍の影響だろうと述べているが、テキストにも志乃の傘の上にガムを吐く女性たちが描かれるなど、その存在の影が見受けられる。

- (20) 藤井淑禎（前掲9）は、兄の入社が戦後のいつか明示されておらず、兄と最後にあった時期や「私」の上京時期の記述には矛盾があり、「年数に若干の幅ができてしまう」と指摘する。確かなのは、終戦の前の年に一二歳であった志乃が現在二〇歳であるという記述であるため、二人の深川歩きは「昭和二十七年（ないしは二十八

年」という地点にあるとする。

- (21) 材木新聞社・深川木場編纂委員会編『深川木場』

(材木新聞社、一九七五・四・一六)

- (22) 木材統制法は一九四六年一〇月末で廃止されていた

のだが、個人営業については「木材統制法施行前に東京都内において九年以上木材業に従事せるもの」という基準があり、重要物資の木材は引き続き統制の枠の中に置かれ、いわゆる「切符」制が採用されていた。兄が入社していた会社は社長の個人営業と思われるので、社長は古くから木場で木材業に関わっていた人物であると予想される。

- (23) 戦後の木場の状況は、東京木場製材史編纂委員会編

『東京木場製材史』（日刊木材新聞社、一九八二・一・

二二）、松本善治郎（前掲13）、材木新聞社・深川木場編纂委員会編（前掲21）などを参照されたい。戦後復興期の木材供給へのテキストの意識は、志乃の危篤の父に会うために訪れた栃木で「私」が眺めた神社の森の描写にも窺うことができる。神社の森は切り倒されて薄い林となっていた。「社寺有林」は、明治政府の成立とともに国有林に指定されていたのだが、国有林が切り出されたのもまた、戦後、一九四七年から一九五〇年頃までのことであつた。

- (24) 材木新聞社・深川木場編纂委員会編（前掲21）

- (25) 一九五三年六月二七日に北九州全域で豪雨による大

水害が起きた。七月一九日には紀州で同じく豪雨による大水害が起きた。また、一九五〇年九月二日から四日にかけて関西、四国、九州を襲った台風の被害とその復興は、木場の好転が語られる際にしばしば言及されている。

- (26) 例えば「赤線」洲崎で転業始まる テレビ屋さん

など五軒』（『朝日新聞』一九五六・一〇・二、朝刊）、

「紅灯」一せいに消える 赤線（法人）転廃業きのう時間切れ』（『読売新聞』一九五八・二・一、朝刊）、

「消える赤線の灯」（『読売新聞』同・二・五、夕刊）

など。法人業者は一九五八年一月末、個人業者は二月末

までに転廃業が課せられていた。

- (27) 材木新聞社、深川木場編纂委員会編（前掲21）

- (28) 一九六三年から着工された新木場の埋め立てが完成

したのは、一九七二年七月であり、同年一月に「新木場」として江東区に編入された。本稿で参照した木場の歴史を伝える文献の多くは、木場が大きく姿を変えることが決定的となった頃に編纂、もしくは刊行が計画されたものである。

- 【付記】 「忍ぶ川」本文の引用は、『三浦哲郎自選全集 第

一卷』（新潮社、一九八七・九・一〇）に拠った。